

「街や景観は3つの関数—固体距離、緑、デザイナー—でつくられる」。日本建築家協会の仙田満副会長はそう話す。街並みは個々の建物のデザインではなく、建物の集合体として形成され、また、緑は街並みを形成するさまざまな構造物のデザインの緩衝材としての役割も持っている。その関係性を大切にしたいと説く。さらに、建築家には子どもの視点に立った空間づくりが必要だと訴える。



日本建築家協会副会長  
仙田 満氏

個体距離、緑、デザイナーの関数必要

## “遊びの天才” 子供に自然体験の場を

「景観は、一つの考え方として固体距離、緑、デザインの3つの関数で表すことができる。例えば京都は町屋の都市だ。建替えでも町屋の伝統を継承している。固体距離がゼロなのでデザインが共通でないと町並みが成立しない」

東京の田園調布などは固体距離があって、緑もあるので、建替えがあってもあまり違和感がないと話す。

その意味でも、3つの中で緑が最も重要だと指摘する。「固体距離がない場合でも、緑が豊富であればデザインの緩衝材になる」。日本の代表的な国道になぜ並木がないのか、と言う。並木があれば多少粗雑な建築があっても街並みはよく見えるのだ。

それにもかかわらず緑の教育は不十分で、専門家が極端に少ない。「全国に造園を教える大学は16校しかなく、年間の卒業生は650人にとどまっている。都市計画にもそうした緑をサポートする人材が必要だと思う」

仙田氏は昨年、子どもの健全な育成に必要な環境をさまざまな分野から考えるため「こども環境学会」を設立、初代会長に就任している。子どもの視点からの美しい国づくりも考える。

子どもを取り巻く環境で大きな問題の一つに、「遊び場の減少」がある。

「昔は神社の境内や空き地、道路などいろんな遊び場があった。この中でも重要な遊び

場が家の前の道路だったが、道路交通法で禁止された。遊びの空間がとにかく激減した」

子どもは学力だけでなく体力も落ちているという。「子どもを元気にする国家戦略が必要だと思っている。生育環境に関しては、われわれ建築家にも責任がある」

建築家に子どもの視点がなかった。「だれもが子どものことはわかっていると思っているが、それは自分の子どもだけのこと。遊びを発見し、遊びの天才としての子どもの復活させるには、時間と空間が必要だ」

そこに「美しい国づくり」の視点がかわってくると思う。今、最も求められている自然体験と共同体験をそこに組み込まなければならない。

「例えば、学校を自然体験の場にしなければだめだと言っているんです。学校そのものを変えなければならない。実際に校庭改善ということを行っています」

建築家の責任として、もう一つ思うことがあるという。「大規模マンションをつくる場合、駐車場は必ず地上に設置する。なぜ地下駐車場にしないのか。建設コストが上がって売れなくなるという議論があるが、地上を緑の空間にすることで住む人にどれだけ寄与するかを考えるべきだと思う」

(日刊建設通信新聞 2005年2月25日)